

南信州地域資料センター収集品の中に、伊那雑誌社発行の『伊那』がある。発刊は大正7年11月20日で、第1号から同8年3月31日の第5号までが現存する月刊誌である。奥付には、編集兼発行人「長野県下伊那郡山本村3836・2小笠原やすの」とあり振替口座を開設している。

各号とも32頁で、第1号の内容は始業式（雑誌創刊のこととみられる）、伊那大学（手工のすすめ、胎内教育、出席と成績、お母さまへなど）、龍峽倶楽部（女哀れ、子守唄など）、伊那小学（愛の力、大黒様など）、赤石図書館、学芸展覧会、読者諸君へ、送金について、投稿募集である。始業式の項は国

歌合唱に続いて、主幹小笠原やすのが開式の辞で「意外に多くの賛成者をえたこと、児童を愛する諸先生・父母等の篤い志に感激して責任の重さを思う」とし、遠山の教員が祝辞を記している。

## 大正期の『伊那』誌について

### 山内尚巳

第2〜5号でも教育関係の内容（郡内各学校の様子、父母・児童の作文など）中心として郡下の地理・歴史・文芸など小冊子ながら多くの投稿を得て多彩な内容であり、興味を引かれる。

ところで、大正期に『伊那』の編集・発行人となった「小笠原やすの」とは如何なる人物か。探索の末に、当時の山本小学校校長小笠原秀雄夫人（推定28歳）と判明した。

秀雄は明治14年8月1日、下條村親田小笠原筆太郎長男として出生。妻やすのも同村小松原細田家の生まれ。苦学力行ののち、同31年3月、長野師範学校第二種講習科終了、検

定試験で本科正教員となり、松尾小に奉職。ついで陸沢小校長・小野川小校長を経て、大正6年3月、山本小校長（36歳）となる。尚昭和5年秀雄が応募した「伊那節」は、1300余編中首位となり、天龍峽に歌碑がある。

秀雄は校長として進歩的な教育を実践し



大正期の「伊那」誌と、小笠原秀雄

た。児童の出席を促すために子守通学の許可。教師・父母・児童が参加する運動会の開催。各区・各平に家庭会を組織して担当教員を配置し、父母との懇談・児童の復習・講演会を開催し、教育方針の説明や家庭の要望の聴取につとめた。また、『伊那』にみられるように郷土文化の育成にも力を入れ、地域の青年の育成にも努力した。形式打破、実利尊重の人物で、保科百助らとともに信濃の三奇人といわれたという。

山本小在職中の秀雄については、現伊那史学会『伊那』昭和40年8月号で「小笠原校長先生の思い出」として当時の生徒浜島郷司が詳しく回想している。

以上のことから、『伊那』は秀雄の思想に基づいて妻の名義で発行されたと考えられる。が、各冊に兎山、明華として執筆しているのが秀雄とやすのの、やすのの尽力も大きかったであろう。発行部数は不明確だが、「仲間の数」（会員数）欄には4割以上が根

一家5人でブラジル・サンパウロ州イグアベ郡レジストに入植した。しかし、昭和8年にやすのが45年に秀雄が55歳で死去した。渡航後17年であった。

下條親田の広い果樹園地帯に生家の屋号・滝場小笠原家と墓地がある。夫妻の墓碑には「秀道開教居士・安心立命信女」と刻まれる。別碑墓誌によると昭和11年4月に武夫が27歳、同年11月に文男が25歳でブラジルで亡くなっている。現在、ブラジルには夫妻の子女ご夫妻が100歳前後でご健在でおられるという。

大正期の時世を反映したと思われる小笠原秀雄・やすのの夫妻による『伊那』は、一家のブラジル移住により、大正8年3月31日の第5号で終刊となったのであろう。